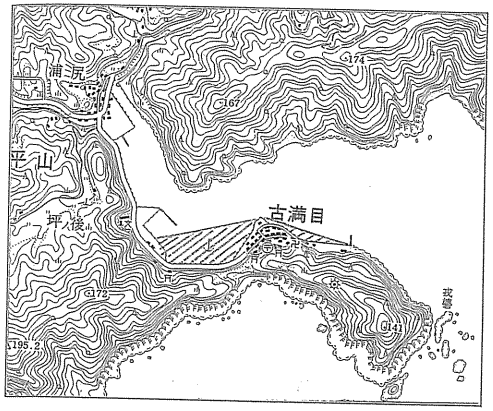
う言い伝えで、柏島千軒説が出てきたのであろうが、昭和六十三年八月の専門家の調査によれば、波打ち際に打ち上げられた小石が重なり、サンゴのカルシウムで固められたビーチロックだという説など諸説入り乱れている。

古代の井戸（西泊沈下説）　西泊の沖に、直径三メートル、深さ七・八メートルの井戸があるというところから、柏島千軒説のように、西泊沈下説があるが、ここも、昭和六三年八月の専門家の調査によれば「井戸の底水は実に冷たかった。あれは真水がわいているのではあるまいか」と遠い昔を偲ぶにとどまっている。

古満目八幡見通し説　今の八幡宮から古満目海岸の「犬もどり」を見通した線内に、一〇〇〇軒に近い家があったという伝承で、今でも海底に、井戸跡や石垣の礎石が残っているという。しかし、それがこの説を裏付ける定かなものでない。「谷陵記」によると、「古満目は亡所」とあり、宝永四年（一七〇七）の大地震、或は近くの安政元年（一八五四）の大地震による大きな被害が、白鳳の大地震の「八幡見通し説」と結びついて、伝えられたものであろう。



古満目の沈下説の想像図（斜線の部分）

慶長の大地震（M・7・9）　慶長九年一二月一六日（一六〇四）の大地震で、わが国地震史上最大級の一つであり、被害区域も、東海・南海・西海諸道と広範囲であり、土佐国では、崎浜で五〇人溺死、西寺、東寺の麓では四〇〇人、甲浦では三五〇人溺死と「谷陵記」に記録されている。地震後の津波による被害も甚大で

あったようである。

宝永の大地震（亥の大変）（M・8・4）　宝永四年（一七〇七）一〇月四日の午前一二時前後に起こった大地震で、俗に「亥の大変」といわれているもので、その規模といい、被害といい我が国最大級のものであった。震源地が土佐沖であったため、土佐に大きな被害を与えているが、被害区域は五畿（京都・大坂・奈良）七道（本州・四国・九州）と広範囲に及んだと伝えられている。

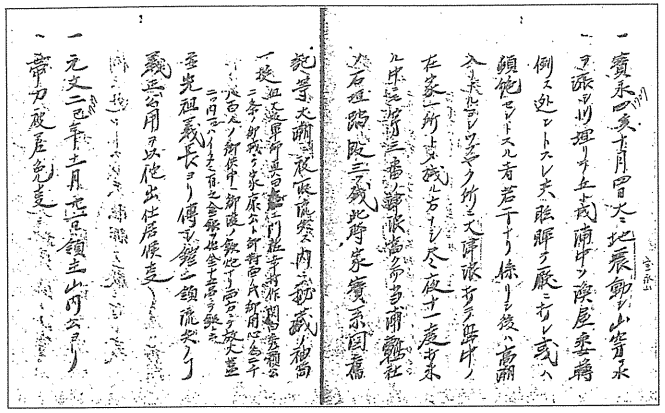
この地震の全容については「谷陵記」や「丁亥変記（ひのとい（テイガイ））」に詳しく出ており、それによって当時の様子を詳しく知ることができる。

午前一一時過ぎに大地震が起こった。あまりの大地震であるため一歩も歩くことができず、山々の崩れる土煙が四方に立ちこめて闇夜のようになり、人々は恐しさにただ泣き叫ぶばかりであった。

そのうちに午後一時過ぎより津波が押し寄せ、海岸の人家はすべて流失し、流れ死ぬ者は数を知らない状況であった。翌五日の晩までに、大津波が一二回も押し寄せ、土佐国中が大被害をこうむったのである。

宿毛市大島の震災状況について、大島の庄屋「小野家家譜」に、

宝永四亥年十月四日、大に地、震動し、山穿（ほじくれ）て水を漲（ちょう）し、川埋りて丘と成、浦中の漁屋悉く転倒す。逃れんとすれ共、眩暉（げんき）て圧（まぶしくかがやき）に打れ、或


宝永の地震の記録（大島の庄屋、小野家々譜より）

は頓絶せんとする者若干なり、係りし後は、高潮入りなるよしつぶやく所に、大津波打て島中の在家一所として残る方なし。昼夜十一度打来る、中にも第三番の津波高くて、当浦鵜社の石垣踏段三ツ残。

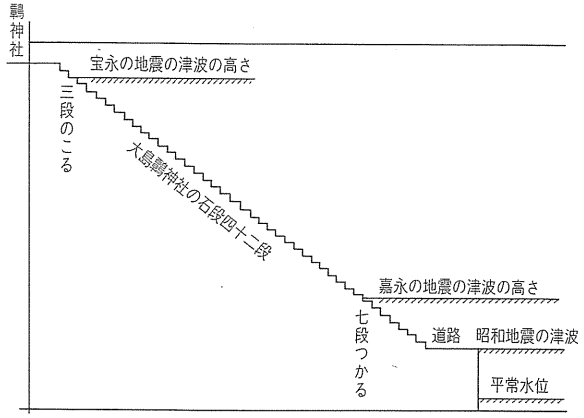
とある。鵜神社の石段は四二段であるので、三九段が水に没したことになる。いかに大きな津波であったかがわかる。

土佐藩ではこの被害状況を次のように幕府に報告している。

宝永の地震の被害（丁亥変記）

一、流家　一一、一七〇軒
一、潰家　四、八六三軒
一、破損家　一、七四二軒
一、死人　一、八四四人
一、過ち人（怪我人）　九二六人
一、流失牛馬　五四二疋
一、損田　四五、一七〇石（一石は一反歩）
一、流失橋　一八八か所
一、亡所の浦　六三か所
半亡所の浦　四か所
一、亡所の郷　四二か所
半亡所の郷　三二か所

大月町でも大きな被害をうけたが「谷陵記」によると次のように

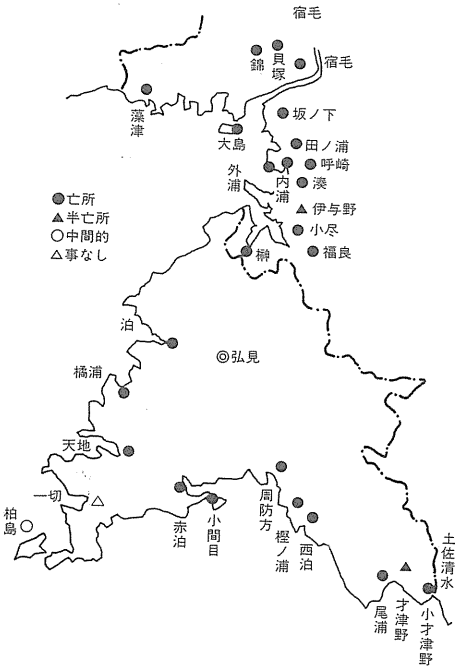


各地震と津波の高さ

記録されている。

大月町の被害

小才津野（小才角）亡所（亡所とは全滅という意味）潮は山まで
才津野（才角）　潮は全部の水田に入る。家は無事
尾浦（大浦）　亡所
樫浦（樫ノ浦）　亡所



宝永の大地震の大月町・宿毛市の被害状況

西泊　亡所　潮は山まで
周防方（周防形）　亡所
小間目（古満目）　亡所
赤泊　亡所
柏島　島の西側、潮が湧き出し堤の高さまできたが、民家は無事であった。
一切　無事
天地（安満地）　亡所
橘（橘浦）　亡所
泊（泊浦）　亡所

南海大地震（M・8・1）

昭和二一年一二月二一日（土曜日）午前四時一五分二六秒、突如として大地も覆えさんばかりの大地震が襲来した。震源地は紀伊水道沖で、東経一三五度七分、北緯三三度、高知県は

強震、ところによって烈震というところが多く、高知市や特に地盤の脆弱な中村市などの建物は、ほとんど倒壊、地震後の火災、津波による被害で、四国、九州、近畿、中国、中部地方で、死者一三三〇人、住家全壊九〇七〇戸、同半壊一万九二〇四戸、非住家全壊二七五一戸、同半壊四二八三戸、流失家屋一四五一戸、焼失家屋二五九八戸の大損害を受けた。

高知県下の津波の高さ（「南海大震災誌高知県」より）

浦戸　四・六メートル　浦尻（大月町）　四・五メートル
須崎　四・四メートル　古満目　三・六メートル
佐賀　五・三メートル　宿毛　一・九メートル
入野　五・〇メートル　宇和島　一・三メートル

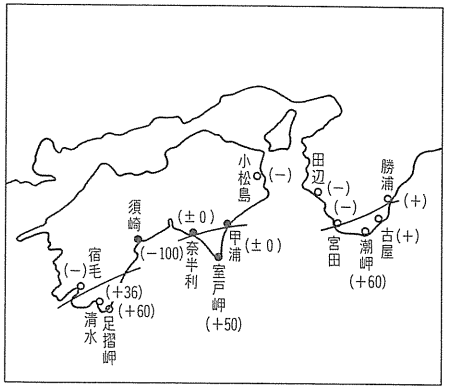
高知県下の地盤の変動

室戸　(+)一・二メートル　足摺岬　(+)一・〇メートル
高知　(−)一・二メートル　小筑紫　(−)〇・六メートル
須崎　(−)一・二メートル　宿毛　(−)〇・三メートル

高知県下の被害状況（「南海大震災誌　高知県」より）

各郡市別被害戸数（昭和二十一年十二月二十八日現在）

郡市別	全壊	半壊	流失	浸水	焼失	計
高知市	一、一七五	一、九五七	〇	一、八八一	二	五、〇一五
安芸郡	三三〇	一、二一四	八	七〇〇	〇	二、二五二
香美郡	五四	二九〇	〇	六〇	〇	四〇四



地盤隆起沈下分布図
「南海大震災誌高知県」より

土佐郡						
長岡郡	九三	三八三	〇	〇	〇	四七六
吾川郡	七五	二七三	〇	〇	〇	三四八
高岡郡	四三八	一、九四三	五五〇	二、二六五	九	五、二〇五
幡多郡	二、七三九	三、三〇二	八	七〇〇	一八五	六、九三四
計	四、九〇四	九、三六二	五六六	五、六〇八	一九六	二〇、二四八

死傷者及行方不明者（十二月二十八日現在）

郡市別	死者	行方不明者	負傷者	合計
安芸郡	三〇人	五人	九六人	一三一人
香美郡	五人	—人	一五人	二〇
土佐郡				
長岡郡	一五	—	四二	五七
高知市	二三一	—	三三四	五六五
吾川郡	八	—	二三	三一
高岡郡	六一	四	一五五	二二〇
幡多郡	三二〇	—	一、一七一	一、四九一
合計	六七〇	九	一、八三六	二、五一五

この地震で高知県は最大の被害をうけたが、なかでも中村市の被害が大きく、家屋全壊一六二一戸、半壊六九六戸、全焼一六三戸、死者二七三人、負傷者一〇三四人、四万十川鉄橋の橋桁（六）が落下という大惨事となった。

宿毛市は、地震による被害も相当あったが、津波は大島、片島を経て防潮堤三か所を破壊し、田畑の浸水又は道路上に浸水し、宿毛、片島間は交通途絶となった。人の被害は、死者六人、負傷者五八名で、家屋の被害は全壊一八五戸、半壊三九〇戸、浸水五二〇戸となっている（「南海大震災誌高知県」より）。

大月町の被害状況は次のようである。

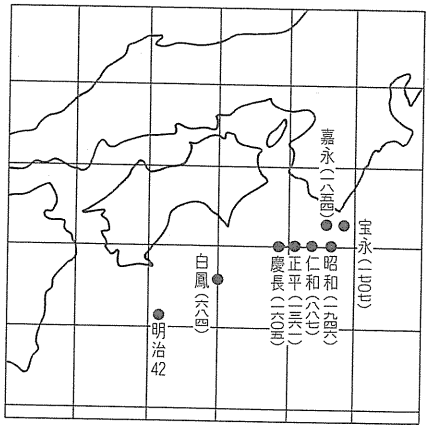
人の被害　死者五人（浦尻一、樫ノ浦三、小才角一）

家の被害　全壊五三戸（旧奥内一七、旧月灘三六）　半壊三〇戸（旧奥内三〇）

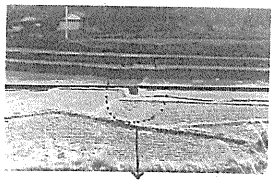
浸水一三二戸（旧奥内九六、旧月灘三六）

津波による被害が大きいのは、古満目、浦尻部落で「南海大震災誌　高知県」の津波の記録によれば、古満目三・六メートル、浦尻四・五メートルと記録されており、浦尻が非常に高かったのは古満目港の奥という地形からであろう、津波の最高位は紀伊半島南端で六・六メートルが記録されている。また地震が満潮直前であったため潮位を高くした原因でもあろう。

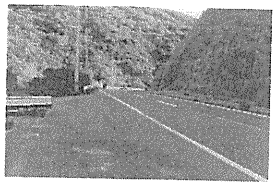
津波は振動が終って約一五分後に第一波が襲来し、合計五回であったがその中で強い津波は三回であったと地元の古老は語っている。

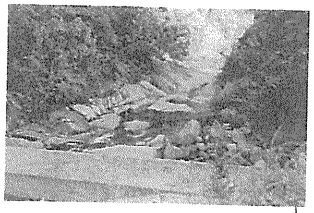


顕著な地震の震源地図



平山川のこの地点まで襲来した





頭集の砂防の下まで襲来した
（県道43号線）

浦尻部落で津波の
高さを示す主婦

昭21・12・21の南海
大地震で決壊した
古満目港岸壁

南海地震で津波襲来のようす（古満目・浦尻方面）

2　その他の災害

火災

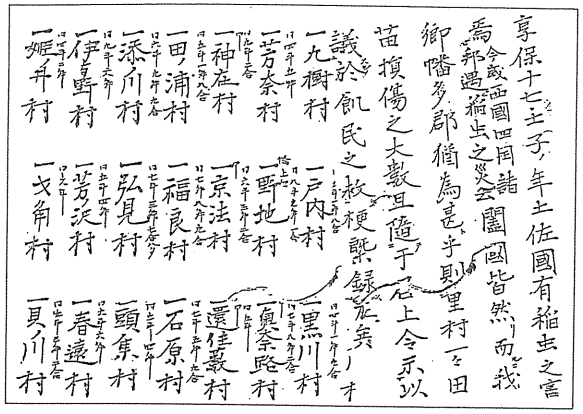
寛文二（一六六二）古満目火災

この火災で集落は全焼、その時に足摺山僧海栄法印を招いて、火よけの祈願をした、その行事の中で若者に「水浴びせ」をしたことが現在まで引き継がれている。昔は旧正月に行われていたが、今では新春の二日に行われている。

寛文一二（一六七二）樫ノ浦火災
元禄九、九、二四（一六九六）柏島火災（一二六戸全焼）
享保九、三、二八（一七二四）柏島火災（一〇〇戸全焼）
元文五、二、七（一七四〇）小才角火災
寛延元、一〇、四（一七四八）小才角火災
寛政一二、（一八〇〇）樫ノ浦火災

飢饉

享保一七年（一七三二）江戸三大飢饉の初めで、特に西日本は虫の害がひどく、「稲の虫は、始め埃（ほこり）のように小さく次に蟻まきのように稲につき、羽がはえ頭は青黒く蟬のようである」と記録されているところから推察しても「うんか」の発生がいかに異常であったかが理解できる。


享保十七壬子年土佐國有稲虫之害
焉令敵西國四国諸
邦遇稲虫之災会闔國皆然而我
御幡多郡猶為甚乎則里村々田
苗損傷之大數且隨于居上令示以
議於飢民之救粳録焉
一九樹村　一戸内村　一黒川村
一芳奈村　一野地村　一奥奈路村
一神在村　一京法村　一横浪村
一田浦村　一福良村
一添川村　一弘見村
一伊与野村　一芳沢村
一姫ノ井村　一春遠村
一戈角村　一頭集村
一石原村
一夏川村

享保17年の被害の状況が記載されている「飢民録」の一部

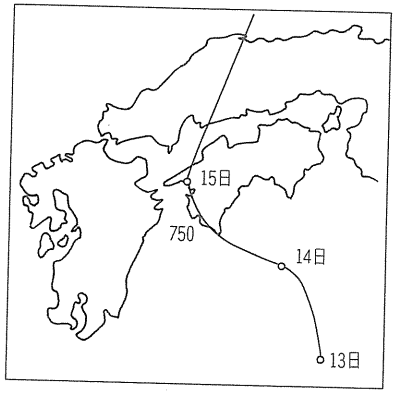
当時の幡多郡の被害状況が記録されている「飢民録」によると次のように記載されている。

幡多郡の被害状況

無立毛（収穫全然なし）	四八村	毛捨（一反につき籾四斗以下）	六一村
籾一石以下	九四村	籾一石五斗以下	二〇村
籾一石五斗以上	一村	土免持（被害なし）	一四村
合計二三八村			

大月町の被害状況

西泊村（姫ノ井村枝）	無立毛（立毛なし）（収穫全然なし）	小才角村（才角村枝）	無立毛
平山村	田一反につき籾二斗一升	添ノ川村	田一反につき籾六斗九升九合
弘見村	田一反につき籾七斗三升七合八勺	頭集村	田一反につき籾五斗四升
芳ノ沢村	田一反につき籾五斗四升	春遠村	田一反につき籾六斗六升
姫ノ井村	田一反につき籾四斗二升	才角村	田一反に
清王村（弘見村枝）	田一反につき籾一石一升八合二勺	つき籾六斗（周防形）周防方村	被害なし
一切村	被害なし		



台風進路（大正9年）

水害

大正九年の大洪水　足摺岬に上陸し、幡多西部を通過した八月一五日の台風の被害は県下一市七郡に及び、死者一八七人、家の全半壊二四八四戸、その他洪水による土木、農産物関係に大きな被害を出したが特に幡多郡下の被害が大きかった。当時幡多郡は三六か町村（現一〇か町村）だったが、北幡を除く三〇か町村は甚大な損害を受けた。当時の災害状況は別表のようであるが、死傷者を多く出したのは、宿毛、八束、奥内（現大月町）小筑紫、和田、三原、下川口、東山等であり、大月町では竜ヶ迫一八名、弘見一名の合計一九名の死者を出した、竜ヶ迫の被害状況については「竜ヶ迫百年のあゆみ」に克明に掲載されているが、このように多数の犠牲が出たのは真夜中の上に、山崩れの直撃による家屋の倒壊によるものと推察されたが、当時戸数僅に七五戸、人口四〇〇余人の小集落にとって、死者一八名、倒壊流失大破の棟数二〇余戸ということは全く惨状の極みである。

被災後の救助活動には、芳ノ沢、弘見を始め、近隣海岸地区から手弁当で、倒壊家屋や堆積土石の除去に協力した。「幡多郡誌」には災害状況を次のように記載している。

一、災害救助金

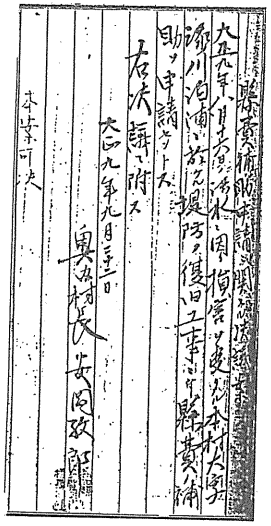
旧月灘村　一六五、九二〇円

旧奥内村　九七、〇〇〇円

●雨　◎雲　①晴　○快晴

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	○	①	◎	●
6月	●	●	●	●	①	○	①	◎	①	①	●	●	●	●	●	●	◎	●	●	●	●	●	●	◎	◎	●	●	●	◎	◎		1	4	6	19
7月	◎	●	●	◎	◎	●	◎	●	●	●	◎	●	●	●	◎	●	●	●	◎	◎	①	●	●	●	◎	●	◎	◎	◎	①	◎	0	2	13	16
8月	●	●	●	◎	◎	①	①	●	●	①	①	①	①	●	●	●	●	◎	●	●	●	◎	◎	①	①	●	●	①	●	◎	●	0	9	6	16

大正9年6、7、8月高知県天気表（高知年鑑より）



添の川、泊浦の堤防復旧工事に対して、県費補助の申請決議書

二、被害状況

旧町村名	人 死	人 傷	畜 死	畜 傷	住家其ノ他家屋 全潰	住家其ノ他家屋 半潰	住家其ノ他家屋 流失	住家其ノ他家屋 其ノ他	堤防 決潰ケ所	堤防 延長	堤防 流失ケ所	堤防 延長
月灘					三		三		九九	四、〇七〇m		
奥内	一九		二		四二	五五			一五〇	六〇〇m		

三、被害状況（南海大震災誌より）

旧町村名	道路 決潰埋没ヶ所	道路 延長	道路 流失ヶ所	道路 延長	橋梁流失ヶ所	田畑 被害面積	田畑 損害見込額	桑園 被害面積	桑園 損害見込額
月灘			三三	五三八m		八六町	三九、〇〇〇円	一町	三五〇円
奥内			三五〇	二、〇〇〇m		一三町	三三、〇〇〇円	五町	一、五〇〇円

高知県に影響を及ぼした戦前の主な台風

明治19年 9月10日	豊後水道を北上、下知村の測候所は観測不能
〃 23年 9月11日	九州・四国を横断、各地大洪水で死・不明者 216人
〃 25年 7月23日	高知市付近に上陸、大雨で徳島県の死者 311人
〃 32年 7月 8日	鹿児島から佐田岬を通過、仁淀川洪水で死者多
〃 32年 8月28日	宿毛市上陸、高知城の鯱、測候所の風力計飛ぶ
〃 42年 8月 6日	宮崎に上陸、天候急変し足摺岬沖で漁船被害大
大正 1年 8月23日	夜須町に上陸、高知県東部安芸郡に多大の被害
〃 9年 8月15日	足摺岬に上陸、幡多地方被害甚大。死者 186人
〃 14年 9月17日	瀬戸内を直進、豪雨・浸水被害甚大で死者40人
昭和 9年 9月21日	室戸台風。記録的な台風で被害は全国におよぶ
〃 10年 8月28日	土佐清水に上陸、中村市を中心に洪水被害甚大

戦後被害の大きかった高知三大台風

災害名	死・不明者	全半壊流失家屋	浸水世帯数 床上	浸水世帯数 床下	浸水世帯数 合計	被害金額（億円）	高知市の総雨量
S45.8.21 台風10号	13 (6)	4,479 (2,035)	26,001 (23,925)	14,292 (10,940)	40,203 (34,865)	734	182.0
S50.8.17 台風 5号	77 (1)	2,218 (12)	12,240 (5,407)	18,659 (8,768)	43,261 (14,191)	1,398	335.5
S51.9.11 台風17号	9 (3)	175 (99)	18,443 (16,932)	32,493 (29,497)	51,217 (46,532)	713	1,305.0

（　）内は高知市

「月刊土佐第28号　タイフーンロード」より

旧奥内村長安岡孜郎は翌年二月村議会において、当時の農漁業の経済状態を次のように報告している。

農家の唯一の副業である養蚕業は暴落により、経済に多大の悪影響をあたえた上に、大正九年八月十五日の洪水で米作に大損害をあたえた。又米価が暴落し農家は惨々たる状況である。一方漁業は近年稀なる豊漁で、大正十年一月までの漁獲高四十一万で大盛況である。

台風

高知県は鹿児島県・宮崎県と並び台風常襲県で、明治から昭和二〇年の戦前までの約八〇年間に、高知県に影響を及ぼした主な台風は、明治一九年（一八八六）九月

一〇日豊後水道を北上した台風を初めとしておよそ一一個が数えられる。なかでも昭和九年九月二一日の室戸台風は、その規模や、北海道をのぞく全国に被害が及んだその大きさと深刻さにおいて、未曽有の台風であったが、高知県という一地域に限ってみると、その被害において、室戸台風をしのぐ台風が数多く襲来していることがわかる。

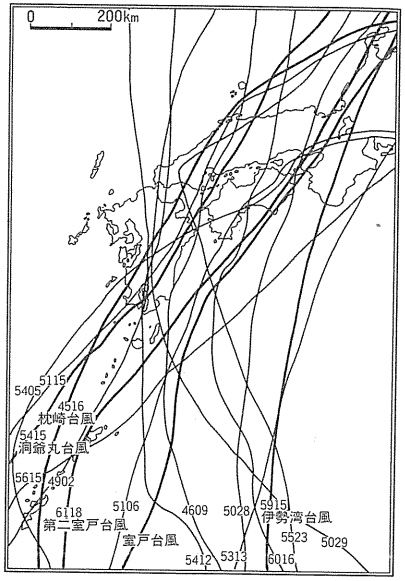
戦後の台風では、全国的にはそれほど印象深い台風ではないが、昭和四五年八月二一日の台風一〇号、五〇年八月一七日の台風五号、そして五一年九月一一日の一七号が戦後の高知県三大台風といわれている。

主要台風

年月日	種別	概況
明、一九、九、一〇	台風	豊後水道を北上し、隠岐へ抜け、猛烈な暴風雨で巨松多く倒る。中村で家屋倒壊九、流失四、大破二二（この年九月に二回大きな台風あり）
明、二三、九、一一	台風	九州四国を横断、高知県の降雨激しく、死者二一三、不明者三、県下各地で洪水の被害あり
大、九、八、一五	台風	足摺岬に上陸、特に幡多郡は甚大な損害、死者一八七、家屋全半壊二四八四
昭、九、九、二一	室戸台風	奈半利町に上陸、室戸岬で九一一・九mb、本土で観測史上最低を記録、被害は全国に及び日本経済をゆるがした。高知県でも死者行方不明者一二二人、全半壊家屋四、五二一戸（全国で死者行方不明者三、〇三六人、全半壊家屋八八、〇四六戸、浸水家屋四〇一、一五七戸）弘見地区で児童三名死亡
昭、一〇、八、二八	台風	土佐清水に上陸、Aクラス台風、洪水は明治二三年以来といわれ、死亡行方不明者一六、家屋全半壊六五九、中村は全町浸水一、九〇〇戸
昭、一八、九、二〇	台風	土佐清水に上陸、西日本で死者七六八人、不明者二〇二人

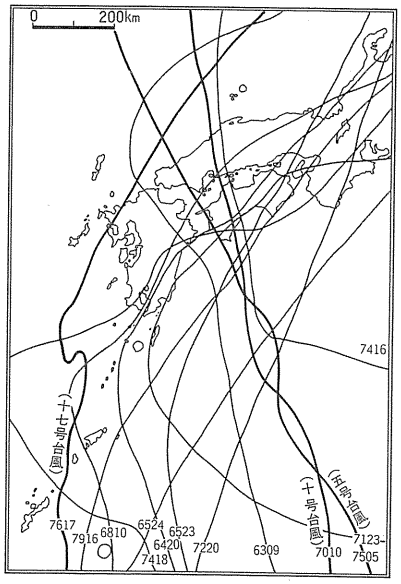
鹿児島県枕崎市に上陸した台風一六号で、上陸時に九一六mb、室戸台風に次ぐ低い記録

昭二〇、九、一七	枕崎台風	高知県での死、不明者一七人、全国の死不明者三、七四六人、このうち広島県だけで二、五五八人で広島県の被害が大きかった。
昭二九、九、二六	洞爺丸台風	鹿児島に上陸したときの中心気圧は九六五mb暴風雨半径三〇〇km以上の強い大型に発達し、しかも時速一〇〇kmという猛スピードで北日本一帯を通過、青函連絡船「洞爺丸」が転覆、死者一、一三九人出し、世界海難事故二番目の大惨事、宿毛での最大瞬間風速五四・八m
昭三四、九、二六	伊勢湾台風	潮岬西方に上陸、最低気圧九二九・五mb室戸、枕崎台風に次ぐ史上三番目伊勢湾で記録的な高潮が発生、多数の死傷者を出した。この状況から伊勢湾台風と名付けられた。死不明者は全国で五、〇九八人と災害史上未曽有の大惨事、高知県は台風進路の西側だったので被害は少なかった。
昭三六、九、一六	第二室戸台風	室戸岬西方に上陸、室戸台風とほぼ同じコースだったので第二室戸台風と名付けられた。室戸岬で最大風速六七m最大瞬間風速八四・五m台風観測史上本土での最強記録、県内死者二、家屋全半壊三〇五
昭四五、八、二	一〇号台風	幡多郡佐賀町付近に上陸、中心気圧九六〇mb最大風速四五m/s、四国西部を横断、松山市西方から中国地方へ通過、猛烈な風雨と洪水で県下各地に大きな被害をもたらす、死不明者一三、家屋全半壊一八、〇〇〇戸、県下の全世帯の九五%にあたる二八万戸が停電、高知市、土佐市、南国市など二六市町村に災害救助法適用、激じん災に指定される。
昭五〇、八、一七	五号台風	午前八時五〇分宿毛市に上陸、伊予灘を通過、清水測候所足摺分室では上陸直前に同室開設以来最高の最大瞬間風速五二・一m/sを記録、最大風速四〇m/sを記録、仁淀川がはんらん、土佐市、伊野町、佐川町など流域市町村を次々とのみ込み、いたるところで山崩れや土石流の被害をもたらした。死不明者七町村七名、宿毛市を含め一九町村が災害救助法の適用を受ける。
昭五一、九、一〇	一七号台風	九月一〇日午後九時から一二日九時まで三六時間にわたって、九州南西海上に停滞していた。そのため、県下では長時間大量の雨が降り続き特に高知市周辺の河川がはんらんし、高知市街全域が浸水し、高知市長は午後非常事態宣言を発表。高知市だけで、四六、五三二世帯が浸水した。死不明者九名、全半壊流失家屋一七五戸



台風経路図１　昭和20年～37年

・表のなかでとくに被害の大きな台風の経路を示した。太線はきわめて被害が大きく特別に名前をつけられた台風で、昭和９年の室戸台風の経路も参考のため示した。



台風経路図２　昭和38年～60年

・戦後の高知県三大台風ともいうべき大きな被害をもたらした7010、7505、7617の３つの台風を太線で示した。7616は高知に上陸していないが、強い勢力を保ち九州南西で停滞したため大雨の被害が出た。